

能と聖書の響き合い

—女性描写の構造的な比較における一考察¹—

The “resonance” between *Noh* and the Bible

— A study of structural comparisons in the representation of women —

樂 満 大 樹*

Daiki RAKUMAN

問題の所在

日本の伝統芸能である能には、さまざまな女性が登場する。湯浅裕子はその著『能ドラマと聖書：響き合う女性たちの物語』（新教出版社、2007年）において、能における女性の物語描写と『聖書』における女性描写の構造的な部分の類似性を複数の事例を通して提示している。その中でも我々は以下の2つの事例を取り上げ、聖書学の視点から、該当する聖書箇所を釈義的に再検討したい。

マリアの賛歌（ルカ 1:46b—55）と海士（湯浅 [2007]、39-52頁）

湯浅は、マグニフィカートにおけるマリアと、能の演目のひとつである「海士」に登場する女性（海士）とが、「低みから自分を解放し、負を正に変革する力」²という側面で響き合っているという。

『海士』

【あらすじ】

母の供養をしに志度の浦に向かった藤原房前は一人の海女と出会う。海女はその昔、唐からこの地に贈られた「珠」が海底へと奪われたことを語る。さらに彼女は、藤原不比等がその珠を取り戻すために海女と契約して子を作り、その海女は自分の子を彼の跡継ぎにすることを条件に海底へと潜り、命と引き換えにその珠を取り戻したという伝説を語る。その後、彼女は自分がその海女の亡霊だと明かして姿を消す。やがて藤原房前の前に成仏したその海女が現われて、『法華経』のご利益に感謝する。³

* らくまん だいき 神学研究科神学専攻博士後期課程
指導教員：須藤 伊知郎

¹ 本稿は、2024年7月10～15日に台湾・花蓮の玉山神学院で行われた、Society of Asian Biblical Studies (SABS), Biennial Meeting での3日目の発表を基にし、加筆および修正をしたものである。

² 湯浅 (2007), 52頁。

³ 本稿における能の演目のあらすじは、天野 (2017) を参考にした。以下、同じ。『海士』に関しては、同書、98頁を参照。

『海士』は、「玉取り物語」の系譜に含まれる物語である⁴。ヒロインである海士という女性は、人格無視、女性蔑視、身分蔑視、職業蔑視の状態に置かれながらも⁵、それらを「超えて、それほどに低められた場から立ち上がって自分を超えるものに命の限りを尽くす」。その意味で彼女は、「低みから自分を解放し、負を正に変革する」のである。

では、この「低みから自分を解放し、負を正に変革する力」という要素がマリアの賛歌の中に見受けられるのか、聖書学的な立場による釈義的考察によって検討したい。

ルカ 1:46b-55の再検討

ルカ 1:48に「この卑しい仕え女」とあるように、マリアは自らの地位を「へりくだらせ」ていることが分かる。この「卑しさ(ταπεινωσις)」という言葉は、P.-G. Müllerは「神の全能と知恵の前にある信仰者のへりくだった態度」だと理解する⁶。M. WolterはIサム 1:11の、ハンナの言葉(LXX: ἐὰν ἐπιβλέπων ἐπιβλένης ἐπὶ τὴν ταπεινωσιν τῆς δούλης σου; 「もしあなたさまがあなたさまの仕え女のみじめな状態に真に目をとめられ、私を覚え」⁷)との語彙的な対応を指摘する⁸。またC. Böttrichは、マリアの「卑しさ」が「その後のすべての世代の中で、彼女が『主の母』として獲得する意義と言う意味でのアンチテーゼとして描かれている」点で、ハンナやエリサベトの「卑しさ」とは異なると主張する⁹。しかしながら、このルカ福音書の箇所とIサム 1:11のハンナの言葉との語彙的な対応は一目瞭然であり、少なくとも、マリアの「卑しさ」がハンナの「卑しさ」とは異なるのだと早急に結論づけることは困難であろう。私見によれば、それらの語彙的な一致の仕方から、ルカがこのIサムエル記の箇所、あるいはそれと同じ伝承源のものを知っていたのだと思われる。そのため、ここではハンナとの関連性を見て取るべきだろう。したがってBöttrichの意見には賛成できない。おそらく、Müllerの言うような「神の全能と知恵の前にある信仰者のへりくだった態度」をこの「卑しさ」から読み取る方が、ハンナとの関連性から見ても妥当であろう。

上述のように、湯浅は「低みから自分を解放」する状態をマリアの賛歌の中に見る。しかしながら、我々はこの状態をマリアの賛歌から読み取ることはできない。むしろマリアは、「神」によって、その「低み」から解放されるのである(52節)。この「神」による「低み」からの解放は、51-53節で用いられているアオリスト動詞から、終末時におこる出来事であると推測される。これらのアオリスト動詞によって、「終末時の観点に立って将来のことを過去のこととして表現」¹⁰されているのだろう。なお、湯浅も「マリアの賛歌で謳い上げられているのはへりくだりの勇気と、それを逆転する神の力への信頼」¹¹と正しく指摘しているが、最終的には「低みから自分を解放」¹²すると結論づけ、海士とマリアとを繋げている。したがって、「低み」から立ち上がっていく点は、海士とマリアにおいて共通しているが、その低みの状態を変える主体が、自分自身(『海士』)か他者(「ルカ福音書」)かという部分においてそれぞれ異なっているのである。

⁴ 湯浅(2007), 45頁参照。

⁵ 例えば、藤原不比等は、奪われた珠を取り戻すために海女と契約をするため、彼は海女を一人の人間、そして1人の女性としては考えておらず、海女をある意味での道具として捉えている。その点において、人格蔑視、そして女性蔑視が起こっていると言える。このことに関して、湯浅(2007), 47頁参照。

⁶ Müller(2001), 35-36.

⁷ 秦(2019), 24頁。

⁸ 他に、Schürmann(1984), 73-74; Bovon(1989), 88; Nolland(1989), 69; Klein(2006), 113, n. 63; Wolter(2008), 102; 嶺重(2018), 66-67, 71頁。Marshall(1978), 83は、Iサム 1:11と創 30:13とが組み合わされて反映されていることを指摘している。また、ここに「貧者の神学」に連なる、ユダヤ人キリスト者共同体の「貧しい者」(アナヴィーム)の讃歌が影響しているとする研究者もいる(Brown[1993], 350-355)。

⁹ Böttrich(2024), 40-41. Fitzmyer(1974), 367も、ここでは信仰の最初の代表者である「主の母」への敬意が示されていると言う。

なお、「負を正に変革する力」は、ルカ福音書において、終末時の逆転によるという意味でのメッセージとして響いているのであろう。

以上の考察により、次のことが言える。

1. 『海士』のヒロインである海士は、さまざまな要素から地位が低められていたが、その低みから自らを解放し、自らの置かれた状況を逆転させた。
2. 「ルカ福音書」におけるマリアはへりくだり、そのへりくだった状態から「神」によって解放され、終末時においてその置かれた状況が逆転される。
3. 二つの物語の女性からはどちらも、「低みからの解放」、そして「負を正に変革すること」が読み取れる。

ルカ福音書におけるマリアの状況は、以上の考察からも分かるように、細かい点において海士の場合と異なるが、湯浅の指摘の基本的な部分は、聖書学的な立場から見ても的を射ているものであると言える。

復活の朝のマグダラのマリア（ヨハ 20:1-18）と井筒（湯浅 [2007]、67-80頁）

湯浅は、キリストの復活の朝を迎えるマグダラのマリアと、『井筒』に登場するヒロインの女性とが、「愛と憎、赦しと復讐、生と死、永遠と瞬時、神と人の間に関するテーマで共鳴」¹³し、これら二つの物語の女性たちは、「結論として負を正にする変革力を証し、私たちに希望をもたら」¹⁴すと言う。彼女によれば、マグダラのマリアは「エロースとアガペーと永遠の命」を体現し、『井筒』の女性は死を超えて続く愛の力を体現しており、この点で響き合うのだという¹⁵。

『井筒』

【あらすじ】

ある僧が旅をしている途中で在原寺に立ち寄ると、ある女性と出会う。彼女は、ここが在原業平と紀有常の娘夫婦が過ごした土地で、一時、他の女性を好きになった業平が、妻の作った歌でその深い愛情を知り、妻のもとに再び戻ってきたという昔話を語る。さらに彼女は、『伊勢物語』の「筒井筒」の歌にある、幼なじみの恋物語を語る。やがて、それらの二つの話に出てくる女性は、実は自分だと明かし、彼女は姿を消す。その夜、僧の前に、業平が使っていた冠と衣を身に着けた有常の娘の亡霊が現れる。彼女は今でも消えない業平への愛を語って舞いながら、業平の面影を思い出していく。その後、夜は明け、僧の夢も覚める。¹⁶

¹⁰ 嶺重 (2018), 72頁。別の意見として、Lohfink (1990), 17-19; Brown (1993), 363などが挙げられる。また、Klein (2006), 114も参照。このアオリストの用法については、Smyth (1920), 432 (No. 1934) の下記の説明を参照。「未来の出来事が実際に起こったものとして鮮明に表現されている場合、アオリストは未来の代わりに用いられることがある」。また、この箇所が元来セム語で書かれた可能性もある。Marshall (1978), 82は、この箇所が元々ヘブライ語の「継続のワウ」構文で書かれており、ワウ+完了系によって、未完了を表す可能性を指摘している。いずれにしても、我々の箇所のアオリストを、未来の意味として訳した方が良いだろう。

¹¹ 湯浅 (2007), 51-52頁。

¹² 同書、52頁。なお、傍点部は本稿筆者による。

¹³ 湯浅 (2007), 79頁。

¹⁴ 同書、80頁。

¹⁵ 同書、79頁参照。

¹⁶ 天野 (2017), 118頁も参照。

『井筒』は、「夢幻能」という、主人公を実在する人物ではなく、霊として登場させるスタイル¹⁷の演目である。この『井筒』では、亡霊としてのヒロインの女性が夜明けと共にいなくなり、旅人としての僧の夢も覚めるという形で物語が終わる。この演目ではヒロインがその女性の愛の大きさゆえに、亡霊という形で死をも超え、現実世界に現れる。また、亡霊として現れる女性が、今なお愛し続けている男性（在原業平）の身につけていた装飾品に「触れている」点¹⁸は、非常に興味深い。この女性が、亡霊という形ではあるが、深い愛によって死をも超えている点は、「負を正にする変革力」を示していると言えるだろう。

では、ヨハ 20:1-18におけるマグダラのマリアは、「負を正にする変革力を証し」しているのだろうか。

ヨハ 20:1-18の再検討

すでに多くの研究者たちが明らかにしているように、ここには、「ペトロと主の愛する弟子の話」と「マグダラのマリアの話」という二つの伝承が組み合わされている¹⁹。我々はこのうちの、「マグダラのマリアの話」に注目したい。

我々のテキストのマグダラのマリア²⁰からは、果たして湯浅の主張するように、「エロースとアガペーと永遠の命」の体現された姿が読み取れるのだろうか。

まず、「永遠の命」を体現しているのは、復活のキリストである。この復活のキリストによって体現された「永遠の命」がマグダラのマリアに始めに示される。研究者たちが指摘しているように、復活のキリストの呼びかけに応じてマリアが自ら「振り向いた（ἐστράφη εἰς τὰ ὀπίσω）」ことは注目に値する²¹。本来ならそこにいるはずのないイエスの言葉を聞いた時、彼女は恐怖で満たされたに違いない。しかしながら、彼女は「振り向いた」のである。この場面によって物語の状況が逆転するが、マリアのこの「振り向いた」という行動には、「負を正にする変革力」が働いていると思われる。まさにマリアのある意味での、勇気ある行動にこそ、「負を正にする変革力」が明示されているのである²²。

なお、湯浅の言うような「エロースとアガペー」は、我々のテキストからは読み取れないようである。たしかに、墓にイエスの遺体を探しに行くマグダラのマリアの姿はヨハネ福音書における最愛の人の探し方に一致しており、そこに愛を見出したり²³、彼女の「泣いていた」姿にイエスへの愛を読み取ったり²⁴する学者もいる。しかしながら、たとえこれらの指摘があっていたとしても、湯浅の言うような「エロースとアガペー」の描写までは、少なくとも我々のテキストからは確認できないだろう。

¹⁷ 小学館国語辞典編集部（2006）、「夢幻能」の項目参照。

¹⁸ 湯浅（2007），80頁も、この点について触れている。

¹⁹ シュルツ（1975），462頁；Schnelle（2016），379など参照。

²⁰ 四福音書のどこを探してもマグダラのマリアが「娼婦」であるという記事は見当たらない。マグダラのマリアが「娼婦」としての「罪深い女」（ルカ 7:37-50）と同一視されたのは、一般的に45世紀頃だと推定される（荒井 [1999]，202頁）。荒井氏は Kitberger（1995）の研究に影響を受けながら、ヨハネ福音書において、マグダラのマリアがベタニアのマリア（ヨハ 11:1-12:8）と、さらにベタニアのマリアがベタニアの女（マコ 14:3-9；マタ 26:6-13）およびルカ福音書における「罪深い女」と重ねられていく可能性をヨハネ自らが福音書の読者に提供していたことを指摘している（荒井 [1999]，207-210頁。ただし荒井は Kitberger を Fitzberger [同書、303頁] およびフィッツベルガー [同書、208-209頁] と誤って表記している）。

²¹ オデイ（2009），481頁；Zumstein（2016），751参照。

²² マグダラのマリアの勇気ある行動は、彼女がイエスの墓へ行く時点でも認められる。なぜなら、処刑されたイエスの墓へ行く場合、途中で誰かに見られたのならば、彼女の命は危険に晒されるからである。また、マグダラのマリアはイエスの十字架上の死を「遠くに立って見ていた」（ルカ 23:49）が、このこと自体も勇気ある行動と言えるだろう。彼女は誰かに見つからないようにしながらイエスの最期の姿を「遠くに立って見ていた」が、それでも彼女が誰かに見つかる危険性は十分に考えられるからである。

²³ Zumstein（2016），750において彼は、「日の出の前に町の外に出るという一連のモチーフ」を根拠に挙げている。

²⁴ 伊吹（2009），407頁。

ヨハ 20:17の「私に触れているのをやめなさい」²⁵という言葉の理由は、復活のキリストが「まだ天に昇っていないため」と考えるのが妥当であろう²⁶。この点で『井筒』の女性の亡霊とは状況が異なる。すなわち『井筒』の亡霊は、死後の世界から現れ、その際に同じく死後の世界にいる在原業平が、存命時に身につけていた装飾品に「触れている」のである。もしかすると、『井筒』の亡霊は、死を超えた当事者として死に留まっている在原業平に「触れている」点で、死の世界と現実世界とを繋ぐ架け橋となっているのかもしれない。一方で、復活のキリストという存在に「触れているのをやめる」ことは、死を超えた当事者としての復活のキリストがこれから天へと昇っていくことが示されている点で、将来的な意味での、現実世界と天の世界とが繋がることを暗示しているのかもしれない。

以上の考察により、次のことが言える。

1. 『井筒』のヒロインの女性は、深い愛によって死をも超える。その意味で、彼女は「負を正にする変革力を証し」している。
2. 「ヨハネ福音書」におけるマグダラのマリアは、死をも超えた復活のキリストの方へと「振り向く」という勇氣ある行動によって、「負を正にする変革力を証し」している。
3. 以上のように、その力の要因となるエネルギーは異なるとしても（前者は「愛」、後者は「勇氣」）、2つの物語の女性からはどちらも、「負を正にする変革力」が読み取れる。

ヨハネ福音書におけるマグダラのマリアの状況は、以上の考察からも分かるように、細かい点において『井筒』の女性の場合と異なるが、湯浅の、「結論として負を正にする変革力を証し、私たちに希望をもたらす」という指摘は、聖書学的な立場からしても的を射ていると言える。

クリシタン能（能とキリスト教の融合）

最後に、キリスト教の要素を取り入れた「クリシタン能」²⁷について紹介したい。

15世紀半ばから、クリシタン大名の庇護のもと、キリスト教を題材にした「クリシタン能」が多く上演されていた²⁸。しかしながら江戸時代の禁教令（1612年）によってその文化は途絶え、詳しい記録や楽譜も残っていない²⁹。その「クリシタン能」の演目が1960年頃から再び作成、および上演されている。今回は、1963年に初演された『新作能「復活」』³⁰の最後の部分を確認し、能と聖書の響き合いを共に考えたい。

新作能「復活」最終部

聖なるかな、聖なるかな。

聖なるかな、聖なるかな。

昔いまし今いまし、とはにいます主をたたへん。

主をたたへん。

²⁵ ここの μή μου ἄπτου に関して解釈が分かれている。進行中の動作を止める指示として「触れているのをやめなさい」、「しがみつくのをやめなさい」、あるいは「すぎるのをやめなさい」と訳すのは、フランシスコ会、岩波訳（旧版、新版ともに）、新改訳（3版、2017ともに）、新共同訳である。また触れることの根本的な禁止として「触れてはいけない」と訳すのは、聖書協会共同訳である。しかしながら μή + 命令法現在 は進行中の動作の中断を意味する（Barrett [1978], 565; Thyen [2015], 761; Wengst [2019], 554）。したがってここでは「私に触れているのをやめなさい」とした。

²⁶ シュルツ（1975）、466頁；Barrett（1978）、565；プルツマン（2005）、543頁；Zumstein（2016）、754など参照。また他の意見として、伊吹（2009）、409-410頁参照。

²⁷ 「クリシタン能」についての詳細な考察については、シュウェマー（2015）、116-140頁も参照。

聖なる、聖なる。
 聖なる、聖なる。
 聖なる、聖なる。
 聖なる、聖なる。

この『復活』という能では、ペトロの3回の否認の場面から始まり、イエスの十字架の死を語った後に、最終的にペトロをも含めた弟子たちの前に復活のキリストが現れるまでが描かれている。作詞の土岐善麿はこの能を、マルコ福音書を基にして作ったと言うが³¹、彼がマルコ福音書を「主として」用いていると補うように³²、他の共観福音書の記事や様々な聖書箇所も組み合わせられ、よりダイナミックな物語へと作り変えられている。この物語は、復活したキリストを体験した、ペトロを含めた弟子たちの喜びの言葉が謡われて完結する。その喜びの歌は、ヨハネ黙示録の言葉を中心に作られている。

なお、能の流派のひとつである観世流は、2012年に「新作能『聖パウロの回心』」を制作、上演した³³。これは、観世流の家元である観世清和が林望に依頼して作成されたものである³⁴。このように、「キリシタン能」は現在に至るまで、復興の兆しを見せている。

むすびに

我々は以上のように、能と聖書の響き合いについて考えてきた。本稿は湯浅の著書に従い、能と聖書に登場する女性について見てきたが、物語のできた時代や背景、そして地域は異なるとしても、能と聖書という2つのものが互いに響き合うことは、聖書学的な観点からしても認められるだろう。

能や聖書には、女性以外の様々な登場人物が現れる。また、人間以外の存在も多く登場するため、これ

²⁸ 宣教師たちも、能・狂言の存在を知っていた。例えば、宣教師であったルイス・フロイスは『ヨーロッパ文化と日本文化』の中で、ヨーロッパの文化を「我々」の文化としながら、日本の文化と比較している。その中で、能や狂言の特徴を述べている。以下、フロイスの言葉をいくつか引用したい。「われわれの間では一人の演技者が仮面をつけてきわめて緩やかに入場する。日本では二、三人の者が素顔で、軽快に舞台上に現われ、鬨鶏が闘うような動作でたがいに対峙する」(13.2)、「われわれの〔劇では、〕登場人物は、人に見られない他の建物から来る。日本人はフネ *fune* の幕をかけられた舞台のかげにいる」(13.6：なお、亀甲括弧内の補足は訳者の岡田による。以下、同じ)、「われわれの舞踊では、太鼓の響につれて姿態をかえるが、歌は歌わない。日本の舞踊では必ずいつも太鼓の音につれて歌う」(13.11)、「われわれの〔舞踏者〕は鈴を手にして真直ぐに進んで行く。日本人は手に扇をもって、いつでもまるで〔原文欠〕のように、または失った物を見つけるために地面を探しまわっている人のように歩く(13.12) (以上、フロイス [1991]、169-172頁)。また、イエズス会が1603年から1604年にかけて発行した『日葡辞典』には、「Nô (能)」や「Givtai (地謡)」、「Qiôguendayü (狂言太夫)」等、数多くの能や狂言に関する専門用語が掲載されている(土井 [1993] のそれぞれの項目参照)。Slavov (2014)、8-9頁が指摘するように、イエズス会の中に能楽に関する知識を持つものがいたようである。このことから、能や狂言は宣教師たちにとってかなり親しみ深い存在としてあったと推測できる。

²⁹ 土岐 (1976)、154-155頁参照。

³⁰ この演目は、作詞が土岐善麿、作曲が喜多実であり、初演が1963年4月25日であった。土岐 (1976)、175-177頁、また林 (2003)、81-83頁参照。これは、喜多流の謡本として制作された。なお、この『復活』に先駆けて1960年に、同じく土岐と喜多によって作られた『新作能「使徒パウロ」』の制作過程で、神学に詳しくなかった土岐は、当時の日本基督教団信濃町教会牧師であった山谷吾吾に教示を受けたという(土岐 [1976]、155頁)。「復活」の制作過程は詳細には分からないが、『使徒パウロ』の制作過程での山谷の教示が『復活』の制作時まで響いていた可能性が高い。詳しくは、土岐 (1976)、155-156頁参照。

³¹ 土岐 (1976)、175頁。

³² 林 (2003)、81頁は「『マルコ伝』の記述に基づくものである」と言い切ってしまう、土岐の示す「主として」の意味合いを無視している。

³³ 初演は、2012年3月6日に、立教大学タッカーホールで行われた。詳しくは、立教大学 (2018) 参照。

³⁴ 詳しくは、観世/林 (2012)、5頁参照。

らの存在を視点とした考察も可能であろう。また、互いに響き合うからこそ、「キリシタン能」も成立しているように思われるため、「キリシタン能」が成立するための「響き合い」の部分、登場人物以外の視点（例えば、物語全体としての物語批評的研究、あるいは、修辭的技法による比較的研究、など）を通して考察することも可能であろう。今後、これらの課題をも含めて、能と聖書の響き合いに関する考察を引き続き行っていきたい。

参考文献

- Barrett, C. K., *The Gospel According to St. John: An Introduction with Commentary and Notes on the Greek Text* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1978).
- Böttlich, C., *Das Evangelium nach Lukas*, ThHNT (Leipzig, 2024).
- Bovon, F., *Das Evangelium nach Lukas (Lk 1,1-9,50)*, EKK III/1 (Zürich/Neukirchen-Vluyn, 1989).
- Brown, R. E., *The Birth of the Messiah: A Commentary on the Infancy Narratives in the Gospels of Matthew and Luke*, ABRL (New York: Doubleday, 1993).
- Fitzmyer, J. A., *The Gospel According to Luke I-LX*, AB (New York: Doubleday, 1974).
- Kitzberger, I. R., “Mary of Bethany and Mary of Magdala: Two Female Characters in the Johannine Passion Narrative ; A Feminist, Narrative-Critical Reader-Response,” *NTS* 41, 4 (Cambridge: Cambridge University Press, 564-586).
- Klein, H., *Das Lukasevangelium*, KEK (Göttingen, 2006).
- Lohfink, N., *Lobgesänge der Armen: Studien zum Magnifikat, den Hodajot von Qumran und einigen späten Psalmen*, SBS 143 (Stuttgart, 1990).
- Marshall, I. H., *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text*, NIGTC (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1978).
- Müller, P.-G., *Lukas-Evangelium*, SKK/NT III (Stuttgart, 2001).
- Nolland, J., *Luke 1-9:20*, WBC 35A (Grand Rapids/Michigan: Zondervan, 1989).
- Schnelle, U., *Das Evangelium nach Johannes*, ThHNT (Leipzig, 2016).
- Schürmann, *Das Lukasevangelium*, 1, HThKNT (Freiburg im Breisgau, 1984).
- Smyth, H. W., *A Greek grammar for colleges* (New York: American Book Company, 1920).
- Thyen, H., *Das Johannesevangelium*, HNT 6 (Tübingen,² 2015).
- Wengst, K., *Das Johannesevangelium*, ThKNT 4 (Stuttgart, 2019).
- Wolter, M., *Das Lukasevangelium*, HNT (Heidelberg, 2008).
- Zumstein, J., *Das Johannesevangelium*, KEK (Göttingen, 2016).
- 天野文雄『能楽名作選 上 原文・現代語訳』（角川書店、2017年）。
- 荒井献「マグダラの女マリア小論——『遊女』説の起源において」『聖書のなかの差別と共生』（岩波書店、1999年、202-220頁）。
- 伊吹雄『ヨハネ福音書注解 III』（知泉書館、2009年）。
- オデイ, G. R. (田中和恵、田中直美 訳)『NIB 新約聖書注解 ヨハネ福音書』（ATD・NTD 聖書註解刊行会、2009年）。
- 観世清和 / 林望『聖パウロの回心：新才能』（観世文庫、2012年）。
- シュルツ, S. (松田伊作 訳)『NTD 新約聖書註解 (四) ヨハネによる福音書』（NTD 新約聖書註解刊行会、1975年）。
- シュウエマー, P.『『キリシタン能』再考：イエズス会日本報告の原本から』『能楽研究 39号』（法政大学能楽研究所、2015年、116-140頁）。
- 小学館国語辞典編集部（編）『〔精選版〕日本国語大辞典 三巻』（小学館、2006年）。
- Slavov, P.「外国人の目に映った能楽の明治維新：海外に伝えられた能狂言のイメージ」（博士論文；大阪大学、2014年）
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/50574/27121_Dissertation.pdf [最終アクセス：2024年11月26日]。
- 土井忠生ほか（編）『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、1993年）。
- 土岐善麿『新才能縁起』（光風社書店、1976年）。
- 秦剛平（訳）『七十人訳ギリシア語聖書 サムエル記』（青土社、2019年）。
- 林和利『能・狂言の生成と展開に関する研究』（世界思想社、2003年）。
- ブルトマン, R. (杉原助 訳)『ヨハネの福音書』（日本キリスト教団出版局、2005年）。
- フロイス, L. (岡田章雄 訳)『ヨーロッパ文化と日本文化』（青 459-1；岩波文庫、1991年）。

嶺重淑『NTJ 新約聖書注解 ルカ福音書 1章-9章50節』（日本キリスト教団出版局、2018年）。

湯浅裕子『能ドラマと聖書：響き合う女性たちの物語』（新教出版社、2007年）。

立教大学「聖パウロがつなぐ伝統芸能と立教学院」（2018年1月25日）（<https://rec.rikkyo.ac.jp/pickup/2012-2019/fr9ga200000004p8.html>）〔最終アクセス：2024年11月26日〕。